

## チャイルド・ライフ・スペシャリスト (CLS) による治癒的遊び (Therapeutic Play) ～病児と家族の心のケアにおける専門職による遊びの活用とその意義～



大阪大学医学部附属病院 小児医療センター  
チャイルド・ライフ・スペシャリスト 馬戸 史子

### 研究背景

チャイルド・ライフ・スペシャリスト (以下CLS) は、医療環境下等、困難や苦痛を伴う状況下にある子ども・家族に、治癒的遊びを主な媒体とした心理面の治癒的介入を通して、トラウマとなり得る心理的負担を予防・軽減し、心理社会的ケアを提供する医療専門職である。アメリカで生まれた小児医療における遊びの専門家であり、高度医療施設・小児専門病院を中心に 1950 年代に北米に発展・普及してきた医療専門職であるが、日本では、北米で教育・研修・資格取得を終えた CLS が全国に 40 数名というまだ新しい分野である。

### 研究目的

小児医療の場で、医療体験・病気体験に伴う患児と家族の心理的負担を予防・緩和し、非医療的方法で精神面の回復や負担の軽減を援助し、治癒的効果を引き出し主体的コーピングに繋がる形で遊びを用いる点に、CLS の遊び介入の独自性・専門性がある。

治癒的遊び(Therapeutic Play) は、心理的負担 (ストレス・トラウマ・恐怖・不安・葛藤・苦痛等) の予防・軽減・回復、感情・情報・体験の消化・表出・主体的対処を援助し、心理面の治癒的効果を引き出す遊び介入である。

本研究では、CLS が専門とし介入の要となる治癒的遊びに焦点をあて、その実践と成果の考察、調査・情報収集を通して、「人間と遊び」の新たな可能性として、専門職による“心を癒す”遊びの活用と意義を実践・考察する。

### 研究方法

#### 1: 調査

患児のトータルケアにおける治癒的遊び介入に関連する専門知識・技術の向上・情報収集に有効な国内外の学会・研究会を通して、CLS による介入における治癒的遊びの意義を考察する。

#### 2: 実践

・実施期間: 2014 年～2016 年

・実施場所: 大阪大学医学部附属病院 小児医療センター (小児科・小児外科病棟/外来、ICU、手術室、放射線

### 治療室、その他各種検査室)

#### ・実施内容:

#### CLS 介入における治癒的遊びの活用

- 1: 心理社会的ニーズのアセスメント
- 2: 心理的プリパレーション
- 3: 治療・処置等医療体験に関わる心理的サポート
- 4: 緩和ケアにおける非薬物的アプローチ
- 5: 医療環境のノーマライゼーション
- 6: コミュニケーション援助・代弁
- 7: ピアサポート
- 8: コーピング援助アクティビティ・イベント
- 9: 移行に関わるサポート
- 10: 家族・きょうだい児支援
- 11: End-of-life Care, Bereavement Care

#### 研究成果

#### 1) 治癒的遊びの手法・意義の調査

治癒的遊びに関わる知識・技術の更新・発展、効果的な介入方法及び意義の調査・情報収集の機会として、1:Child Life of Greater New York: Professional Development Conference, 2:Expressive Therapies Summit, 3:Child Life Council: Annual Conference on Professional Issues に参加し、同職種 (CLS) ・他職種 (Play Therapist・Art Therapist 等) との意見情報交換、及び、継続教育を通して得た治癒的遊びの手法、治癒的遊びに関わる専門知識・技術を、治癒的遊び介入の発展・質の向上のために、臨床業務に活用した。

治癒的遊びのアプローチ方法は多様であり、介入内容は多岐にわたるが、意義として、非薬物的アプローチ・心理面の治癒的介入による苦痛・不安・ストレスの予防・緩和、医療面・発達面・情緒面のニーズに応じた理解・安心を伴う主体的対処の援助、自己実現・闘病意欲の促進、闘病中の QOL 向上、コミュニケーション手段、治癒的関わりの援助が挙げられる。

#### 2) 治癒的遊び介入の実践と発展、意義の検証

患児・同胞の心理社会的ニーズの理解・評価・代弁、個々

のニーズに対応したツールの創作・開発・活用、医療体験及び病気についての理解・心の準備・受け入れの援助、苦痛・ストレスを伴うトラウマとなり得る治療・処置中の主体的対処の援助（リラクゼーション/ディストラクション/コーピング援助アクティビティ）、心理的負担を軽減する環境作りへの介入、患児・家族間及び、患児・医療者間のコミュニケーションをサポートする関わり援助、個別セッション/グループ・セッションを通じたコーピング援助（ストレスや不安の緩和、感情・体験の共有・消化）、非薬物的アプローチを通じた苦痛緩和、入院・転院・退院・復学等、環境や状況の変化に伴う支援、家族・きょうだい支援（病気・治療の理解の援助、治癒的遊び・関わりによる不安・ストレス・疎外感の軽減）、終末期ケア・グリーフ・ケアにおけるレガシービルディング・ピアサポート、等における治癒的遊びの活用を実践し、その効果を考察した。患児の反応（①興味・関心、②緊張緩和・親しみ・安心感、③理解・情報処理、④主体的参加・主体的選択、⑤感情表出・意思伝達）は個々の状況により異なり、その多様性・流動性に応じて各ツール・手法を組み合わせ、適切に活用・併用することにより、子どもの個別ニーズや変化に応じた柔軟な対応、より効果的な介入が可能となる様子が観察された。

また、CLSが実施する治癒的遊びは、医療面・発達面・心理面のニーズを繋ぎ、混乱・動揺・不安を緩和する危機介入の媒体、患児・家族の本来性・日常性・主体性を尊重・回復・維持する有効な手段であることが観察された。

3) 治癒的遊びの意義についての情報提供・理解普及  
治癒的遊び介入は、他職種理解・協力を得て実施された場合、継続性・一貫性のあるケアとしてより効果的な介入となる。院内における多職種連携支援に加えて、院外に向けても、CLSが専門とする治癒的遊び介入の内容・意義についての情報共有・理解普及のための取り組みを実施した。2014年5月：日本小児科学会雑誌 第108巻第5号：「小児科領域における医学用語およびコミュニケーション手段を考える：子どもの安心・理解・対処を援助するコミュニケーション〜チャイルド・ライフ・スペシャリストの視点から〜」

2014年6月：緩和ケア 第24巻6月増刊号：「小児がん治療を受ける幼児期子どもたち」

2014年4月：第50回日本小児循環器学会学術集会：「小児心臓移植チームにおけるチャイルド・ライフ・スペシャリストの役割と多職種連携支援」

2014年12月：大阪府民のための公開講座：「移植を乗り越える子どもたち」

2015年4月：The 11<sup>th</sup> Congress of Asian Society for Pediatric Research (ASPR 2015) 教育講演：“The Role of Child Life Specialists in Pediatric Health-Care

Settings: Therapeutic Interventions for Empowering Children and Families to Cope with Psychosocial Challenges”

2015年4月：第79回日本循環器学会学術集会 第11回心臓移植セミナー：「小児心臓移植チームにおけるチャイルド・ライフ・スペシャリストの役割」

2015年6月：第1回Destination Therapy 研究会：「重症心不全終末期の患者と家族支えるために〜チャイルド・ライフ・スペシャリストの立場から〜」

2015年7月：日本チャイルド・ライフ・スペシャリスト協会研修会：“Empowering Children and Families to Cope with Psychosocial Challenges Associated with Cardiac Diseases and Heart Transplantation”

#### 考察・結論

医療環境下にある子どもの心理社会的ニーズは、過去の医療体験による影響、対ストレス脆弱性、コーピングスキル・方法、情報処理・コミュニケーションスキル・方法、本人・家族の不安・理解度、家庭環境・家族関係等、多岐にわたる。CLSは、個々のニーズに対応するため、アセスメント・計画・介入・評価の各段階において、治癒的遊びを主な媒体として介入する。

子どもは、医療環境下、医療的ニーズを抱えた状況下でも、患児・患児の同胞としてではなく“子ども”としての生活・成長・自己実現の機会を必要とし、医療体験に対しても、単に情報を得て状況を理解・受容することではなく、可能な範囲の見通し・コントロール感、希望・安心感を得て主体的に対処する方法・手段・環境を必要としており、遊びがその主要な媒体となる。また、認知的・情緒的に、言語表現による感情の表出・共有・消化、体験の理解・受容、情報の伝達・処理に、個別の段階と方法がある子ども達にとって、遊びを通じた非言語表現は、認知面・情緒面の許容範囲に見合う対処の手段となり、客観的視点と主体的体験、プロセスとイベント、感覚体験と感情体験を繋ぐ架け橋となる。

治癒的遊びは、単なる楽しみや発達支援ではなく、情緒的葛藤・ストレス・トラウマとなりうる体験に関わるコミュニケーションの手段となり、その心理的負担の評価・予防・克服・緩和・回復の手段となる。また、困難や脅威（病気・治療の苦痛・死の不安）に直面する子どもに逃げ場や居場所を提供し、子どもらしく成長しながら医療体験を乗り越える力を引き出す様子が見受けられる。

治癒的遊びは、小児医療の場で、心理面の治癒的効果を引き出す非薬物的アプローチとして、心理的苦痛を緩和し、予防・回復を促す有効な介入方法の一つと考えられ、本研究は、「人間と遊び」の新たな可能性として、医療専門職による治癒的遊び介入の実践と意義に関する理解の普及に貢献すると考えられる。